

機器開発 (3), データ解析 (1)

謝 辞

投稿前の本稿にコメントしていただいた本学会員 (三好 真氏 [国立天文台電波研究部], 和田桂一氏 [国立天文台理論研究部]) と山田雅子氏 (国立天文台 ALMA 推進室), 小平桂一氏 (総研大学長), 西田篤弘氏 (総研大理事) に感謝する。データに基づき定量的に本稿記事を執筆することを薦めてくださった祖父江義明氏 (鹿児島大学・日本天文学会前理事長) に感謝する。

参 考 文 献

- 1) 国立天文台, 2005, 国立天文台年次報告. Web 版: <http://www.nao.ac.jp/A-Report/index.html>
- 2) フリー百科事典 『ウィキペディア (Wikipedia)』, <http://ja.wikipedia.org/wiki/インパクトファクター>
- 3) Journal Citation Reports, Thomson Scientific, 2005
- 4) 沢 武文, 2000, 天文月報 93, 29 — “どうなる? これからの天文学研究環境のゆくえ (第 1 回) 「天文学研究者人口調査」”
- 5) 望月優子, 坪井陽子, 2004, 天文月報 97, 712 — 「就職: 採用する側とされる側のミスマッチ?」第 2 部: 就職問題に関するアンケート集計結果—望月・坪井からの応援歌—”

寄 稿

和 田 桂 一

(国立天文台天文シミュレーションプロジェクト/一本書こう会会員 〒181-8588 東京都三鷹市大沢 2-21-1)
e-mail: wada.keiichi@nao.ac.jp

新田氏, 荒木田氏の本記事を読んだ大学院生やアマチュア天文愛好家の皆さんは, 「えっ? プロなのに, 数年に 1 本しか論文を書いていない人がいるの?」と, もしかすると驚かれたかもしれない。また, アクティブな研究者を自認する天文学会会員諸氏は, 「年 1 本? 楽勝だな」と思ったかもしれない。ある年の例会で, ゲスト参加した関西の某教授が「年 1 本論文を書いて喜んでるようでは甘い!」と一喝した, なんてこともあった。「たかが 1 本, されど 1 本」なのである。

本記事で紹介されていたように, 国立天文台のファカルティですら, 平均して 3 年に 1 本程度しか論文を書いていない (2005 年の統計) らしい。しかし, 国立天文台は比較の対象としては, あまり適さないかもしれない。「共同利用の装置開発, 運用が主たる業務」の国立天文台スタッフは, 「論文書くだけが仕事じゃない」と思うだろうし, 一

方, 大学の先生からすると教育のデューティーが少ない (全くないわけではない) のだから, 国立天文台のスタッフは, 論文をもっと書いてもよいはずだ, となる。つまり, 3 年に 1 本というのが, 多いのか少ないのか, 判断は難しい。

論文数が議論にのぼると, 必ず「論文は数じゃない」と言う人がいる。それはそうだし, 実際, 数年以上の観測データを元にしなくて書けない論文もある。しかし, 1 本も書いてなければ, 質の議論のしようがない。研究した成果を論文として発表するというのは, あくまで研究者としての「必要条件」である。必要条件を満たそうと努力するか, しないかは人それぞれだ。実際, 某巨大プロジェクトで本当に忙しくしていた一本書こう会の某会員は, 「盆暮れしか論文を書く暇はない」と嘆きつつも論文を書く努力をしていて, 感心したものだ。

論文を書けないと、「会議、授業、書類書き、学生指導、共同利用の雑用、パブリックアウトリーチ……(以下、つづく)で忙しくて」とか、さまざまな「言いわけ」をしたくなる。もし、本当に、物理的に「研究する・論文を書く」時間がとれないのだとすると、それは、「研究以外の」仕事を見直す必要があることを意味しているのではないだ

ろうか。「重要だ」と思っている会議・書類書き・業務、etc., 本当にそれらは「論文を書くことよりも重要」なんだろうか？ 一本書こう会の例会は、年に一度、我が身をふり返って、研究者のあり方と日々の仕事について考える貴重な機会だと思っている。